

---

# ほたる

海月くらげ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ほたる

### 【コード】

N5380I

### 【作者名】

海月くらげ

### 【あらすじ】

鳴かぬ蛩が身を焦がす。

だから、わたしは

だから、ぼくは。

**(前書き)**

前半と後半で視点が違います。

好きで好きで どうしようもなくて

それでも好きで 苦しくて しかたがないんです

このまま黙っていることなんてできなくて 身体が 心が 熱くて

いつそのこと燃えて消えてしまえばいいのに

好きなんです 涙がこぼれるくらい

好きなんです 息もできないほど

好きです 死んでしまいたいくらい

だから 迷惑だとわかっていても

この想いを伝えることを——ゆるしてください。

今日の日のために、昨日はいつもより念入りにお風呂に入った。半身浴をして、とっておきのトリートメントをつかった。

お風呂上がりにはいい匂いのするアロマオイルでリラックスしながらマッサージもして、お肌のお手入れも完璧。

緊張して寝付けなかったけれどなんとか最低限の睡眠をとって、今朝は早起きをして支度をした。

制服にしわ一つないようにアイロンをかけ、髪を艶が出るように梳かしてからゆるく編み、食欲はなかったけれど朝食もとった。

後悔しないために、今の最高を心がける。

手紙は、書かなかった。

きちんと自分の言葉で、顔を見て伝えたかった。

手紙を書いてしまえば、それを逃げ道にしてしまいそうだった。

わたしは弱い。だから退路は一つも残してはいけない。

あればわたしはそこに逃げ込み、一生後悔し続けるだろう。

だから、わたしはわたしを追い詰め、壊すのだ。

受け入れてもらえないとわかっていても、自分だけでなくあの人も傷をつけるとわかっていても、わたしは、伝えよう。

誰にも知られず燃え尽きる前に、身を焦がすこの想いを。

わたしの名前。本当はあまり好きではない。

あまりにもあの生きものはかない。たった7日。その短い日々  
にありつたけの想いをこめて、命を燃やして恋をする。

目の前の友人が昔わたしに言った。

「あなたは名前のとおり、蛍だね」

あの時は意味がわからなかった。

今はなんとなくだけでも、わかる気がする。

でも、わたしは蛍であることをやめるのだ。

「おはよう」

「おはよう」

友人はわたしをじっと見つめ、穏やかに笑った。

「うん。良い顔だ」

「ありがとう」

友人は、今も昔も変わらない。

お世辞ではなく、いつも本音で語る。独特の感性で世界を見つめている。

だから、飾らないそのほめ言葉を素直に嬉しいと思えるのだ。

「鳴かぬ蛩が身を焦がす、とはよく言ったもんだね」

友人は、わたしの想いを知っている。

そして、今にも燃え尽きそうなたしの傍に黙っていてくれた。

何も言わないわたしの傍に、何も言わずに。

この想いは一度も口にしたことはない。つぶやきにすらのせない。

最初で最後、あの人に、ただ一度だけ、そう決めたのだ。

恋人がいることを知っている。とても愛し合っていることも知っ

ているのではなく、わかる。

優しく、甘く見つめる視線、仕草、その一つ一つに心があふれている。

万が一にもわたしに想いを返すことはない。それくらい、強く、深く、愛しいその想いをわたしは知っている。

だから、わたしの想いの行き場所なんて、最初からなかった。それでも、蛍のように黙って燃えることなんて耐えられなかった。

9

だって、蛍は、ただ光るだけなのだ。  
相手に気付いてもらえなかったら、そのまま何も残さず消えてしまふ。

——— だから、だから、わたしは。

美しい、と心底思う。

言葉にしなくても、表情が、瞳が、何より雄弁に秘めた想いを語る。

どこかで、蛍が光るのは身のうちの恋心が光となってあふれているからだ、と聞いた。

燃えたつように熱く、切ない色の瞳に、友人自身を名前のとおりに『蛍』と例えたのはいつだったか。

容姿なんて問題にもならないくらい、友人の想いは美しい。言葉にならない想いは、より一層友人の美しさを引き立てている。凜と背筋を伸ばし、前だけをひたすら見つめ、逃げることなく、目を背けることすらしない。

まるで、呼吸や瞬きすらも惜しむようである。

誰かを一途に想う姿を、こんなにもまばゆく思うなんて。

蛍は成虫になって、相手を見付け、愛し合い、子を残す。  
ほんの数日に生の全てをかける。

だから、あんなにも美しくはかなく輝くのだろう。

相手を見つけれなかったら、その生命はただ散ってしまっただ  
ろうか。

蛍火、という言葉どおりに美しい火で身も心も焦がし、燃え尽き  
て、あとには何も残らないのだろうか。

———  
そんなことはない。

蛍の美しさは、一度目にしたら二度と忘れられない。

人の心を、熱を持たないはずの燈で温め、癒す。

あの愛しい光は心の奥深くに刻み込まれ、永遠に輝く。

だから、ぼくの心にもこんなにも強くあとを残すのだろう。

蛍、ぼくの友人。

君の全てがぼくを焦がすなら、ぼくは。

よじ。

——ぼくは、何も言わずに燃え尽き

(後書き)

本当の『螢』は名前も出なかった友人でした——という話です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5380i/>

---

ほたる

2010年10月12日05時41分発行